

生涯にわたって音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成(1年次)

～学びを生かし、主体的に音楽と関わる生徒を育成する方略の研究～

工藤 美奈子

Minako KUDO

概要

前次研究では、音楽と生活との結び付きを捉え、学びの意義や価値を実感できる生徒の育成を目指した。具体的には、学びの成果と課題を明確にさせたり、表現させたりするための方略や、自らの思いや考えを基に創造する学びを促す方略を試みた。その結果、生徒自身が、異なる題材や領域において学習内容の関連性に気付いたり、学んだことを活用して学びを広げたり深めたりする中で、学びの意義や価値を実感することができ、一定の成果を収めることができた。そのうえで立ち、新研究では、生徒自身が授業の中で獲得した学びの系統性や関連性を活用する中で、学ぶことに対する「意欲」を「意味」へと転換させるための方略について研究を進める。

キーワード：「逆向き設計」論、本質的な問い、永続的理解、パフォーマンス課題、他者との協働、メタ認知

1. はじめに～研究の目的

新学習指導要領解説では、音楽科で育成を目指す資質・能力を「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」としている。また、資質・能力の育成に当たっては、生徒が「音楽的な見方・考え方を働かせて学習活動に取り組めるようにする必要があること」が示された。「音楽的な見方・考え方を働かせて学習することによって、実感を伴った理解による「知識」の習得、必要性の実感を伴う「技能」の習得、質の高い「思考力、判断力、表現力等」の育成、人生や社会において学びを生かそうとする意識をもった「学びに向かう力、人間性等」の涵養が実現し、ひいては生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力が育成されると考えられている。このことにより、生徒が教科としての音楽を学ぶ意味が一層明確になった。

さらに、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することは、生徒がその後の人生において、音や音楽、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むことにつながる」とも記されている。こうした背景から、生徒自身が学ぶ意味を考えることで学びの質を高めるとともに、学校での学びを終えた後も主体的に音楽と関わり、豊かな人生を送ることのできる生徒を育成することが重要だと考えている。

2. 生徒の実態

本校音楽科では、前次までの研究の成果として、生徒自身が学びの変容を実感するとともに、学びの成果を以後の学びに活用しようとする意欲の向上が見られたなどのことがある。特に、表現領域の創作分野においては、個々の作品の質が向上したことに加え、既存の曲についても「つくる」視点から鑑賞したり、演奏したりするような変容が見られた。しかしながら、学びの質を一層

高めるための指導については、以下のような課題もある。

- ・音楽科の学習と生活との結び付きを生徒に実感させられるようにすること
- ・音楽科の学習が生活や社会で役立つと生徒に実感させられるようにすること

今後は、学びに日常の音楽を題材や教材として適切に位置付けることや、学びの系統性や関連性を活用して日常の音楽と向き合わせることが、本校の生徒にとって重要であると考えている。

2. 1. 目指す生徒像

本校音楽科では、以上のことを踏まえ、目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・学びによって得た知識及び技能を、思考・判断・表現等に関連させたり、活用させたりできる生徒
- ・音楽科における学びを活用し、日常の音楽と向き合おうとする生徒

3. 研究主題

先にも述べたが、今次の改訂で、中学校音楽科は「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指す教科と明示された。すなわち、毎時間の授業後にはもとより、題材や学年が変わっても、さらには卒業後にも音楽と主体的に関わることのできる力を育成することが求められている。

以上のことから、本校音楽科の1年次研究の主題を以下のように設定した。

生涯にわたって音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成(1年次)
～学びを生かし、主体的に音楽と関わる生徒を育成する方略の研究～

本校の1年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえた「質の高い学び」に向かうために、以下の「4つの視点」が重要であると捉えている。

- ・「意欲」から「意味」への転換
- ・「学び方」を学ぶ自己調整的な学習
- ・知識発見から知識構築へのプロセス
- ・知識や最適解を他者と創るプロセス

この中で、本校音楽科では、特に『「意欲」から「意味」への転換』に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で重要な視点であると考えたためである。

4. 1. 「永続的理解」へと至る「本質的な問い」の設定

小山英恵は、「領域の『本質的な問い』は、単元レベルの『本質的な問い』を包括するものであり、あらゆる単元の根底にある問いである。(中略)単元レベルの『本質的な問い』は、各単元において焦点化される内容を意識しつつ、そこではあくまで知識やスキル等を総合させる表現や鑑賞の一連の営みが求められていることを念頭において設定することが大切である。」と述べている。

音楽科は、学年を追って新たな学習内容を積み上げていくというよりも、表現と鑑賞の多様な学習活動を繰り返していくことにより、学びの対象を広げたり、学びの質を高めたりするという特徴のある教科である。こうした教科の特質を鑑み、題材や学年(場合によっては領域)などの垣根を越えて、教科や題材の中核となる「本質的な問い」を繰り返し問うことにより、題材や領域の関連に気付くことができたり、それらを意識して学習したりすることができる。と考える。

さらに、西岡加名恵は、『「本質的な問い」を問うことで、個々の知識やスキルが関連づけられ総合されて『永続的理解』へと至ることができる。』と述べている。

そうしたことから、「本質的な問い」を繰り返し追究していくことが「永続的理解」へとつながり、ひいては、学校での学びを終えた後にも学びを生かして音楽と関わっていくことができると考える。

4. 2. 「本質的な問い」を引き出すパフォーマンス課題の設定

西岡は、「パフォーマンス課題は、学んだ知識やスキルを応用して実践したり表現したりすることを求めるような、複雑で総合的な課題である。」と述べている。また、小山は、「音楽科において、パフォーマンス課題は、単に演奏する、創作するといったパフォーマンスを求めるのではなく、さまざまな知識や技能を子どもが自らの生と関わらせながら総合的に活用するという創造的な営みのパフォーマンスとして現れる『永続的理解』を、すべて

の子どもたちにもたすためのしかけとして捉えることができる。」と述べている。

学習指導要領解説には、「知識」の習得に関する指導について、「音楽を形づくっている要素などの働きについて実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞などに生かすことができるようにすること、(中略)『知識』は学習の過程において生徒個々の感じ方や考え方等に応じ、既習の知識と新たに習得した知識等とが結び付くことによって再構築されていくものである」と記されている。

つまり、音楽科の学習において、単に音楽記号の読み方や意味が「知識」ではなく、それらを「理解」したうえで「表現できる、思考できる」状態まで引き上げた状態が「知識を習得した状態」と考える。

そこで、4. 1. の手立てを用いた授業実践の中で、様々な知識や技術を活用しながら「パフォーマンス課題」に取り組むことで、知識や技能を習得したり、向上させたりするとともに、先述した通り「永続的理解」へともたすことができると考える。

5. 実践と考察

「絵画と音楽

～組曲「展覧会の絵」から～(第2学年)」

5. 1. 題材の構想

対象である第2学年の生徒の97.8%は、コロナ禍における臨時休校中においても「音楽と触れ合う機会があった」と答えている。その具体的な内容は、歌や楽器の演奏、鑑賞など様々ではあったが、取組を行う理由は、「音楽そのものや音楽活動が好きだから」「リラックスしたい、気分を高めたから」などと述べている。こうした状況から、生徒たちは「音や音楽」と「生活や社会」との関わりについて実感したり、考えたりしていることがうかがえる。しかし、その一方で、授業以外に音楽と触れ合う機会のない生徒がいることを考えると、生涯にわたって音楽文化と豊かに関わるための資質・能力を育成することが急務であると考えた。

そこで、本校音楽科では、「逆向き設計」論において提唱されている『永続的理解』を「他の曲や題材、領域、分野においても使うことのできる様々な音楽的能力を使って演奏したり、創作したり、鑑賞したりするもの」と設定し、『本質的な問い』を「音楽のもつ魅力とはどのようなものか。」「音楽における創作とはどのようなものか。」とした。

本題材で教材として扱った「組曲『展覧会の絵』」は、ロシアの作曲家ムソルグスキーが、親友であったロシアの建築家・画家ガルトマンの遺作展に足を運んだときの印象をもとに、ピアノのための組曲として作曲したものである。様々な作曲家によってオーケストラで演奏される

ために編曲されているが、本題材では、色彩感あふれる響きや力強さなどに満ちている、ラヴェルによって編曲されたものを教材として取り上げた。

組曲は全部で10曲から成り、冒頭のプロムナードが、旋律のかたちや楽器を変えながら、曲と曲の間にいくつか挟み込まれている。プロムナードは、絵から絵に移る作曲者の歩みや気分を表すとともに、曲と曲とを結び付けて、組曲全体にまとまりをもたらせる働きをしている。

組曲「展覧会の絵」	
プロムナード(冒頭)	
第1曲：グノーム	
プロムナード(第1曲と第2曲の間)	
第2曲：古城	
プロムナード(第2曲と第3曲の間)	
第3曲：テュイルリー	
第4曲：ビドロ	
プロムナード(第4曲と第5曲の間)	
第5曲：卵の殻をつけてひなどりのパレエ	
第6曲：サミュエル・ゴールドンベルクとシュムイレ	
第7曲：リモージュの市場	
第8曲：カタコンベ	
死せる言葉による死者への話しかけ	
第9曲：鶏の足の上の小屋	
第10曲：キエフの大門	
* 下線の引いている曲は授業で扱った曲。	
* 授業内では、便宜上、1回目のプロムナードを「第1プロムナード」、以下同様に第2、第3…と呼んだ。	

本題材では、「組曲『展覧会の絵』とは、どのような魅力を秘めた作品なのかを追究する」という活動を中核に据えた。具体的には、題材の冒頭で生徒が感じた疑問を調べたり、いくつかの曲を鑑賞したりする学習活動を設定した。単に組曲の中のいくつかの曲に対する理解を深めることに留まるのではなく、「組曲」としての魅力を追究させるために、教師が鑑賞する曲や思考の視点についてアプローチを試み、生徒自身が様々な角度からこの曲を捉え、終末ではこの曲が長く親しまれている理由をレポートとしてまとめる学習活動を設定した。

本題材で講じた手立ては、以下の2つである。

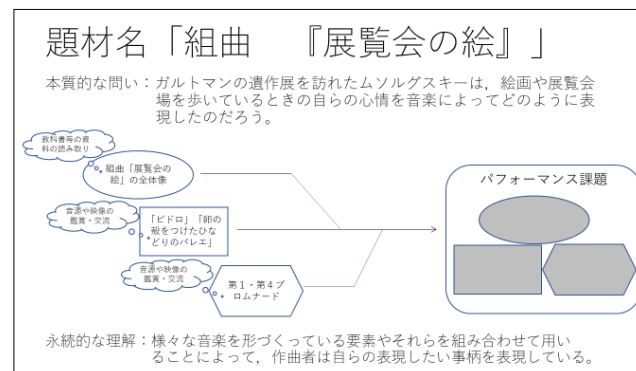
- ①「永続的理解」へと至る「本質的な問い」の設定
 - ②「本質的な問い」に対する理解を引き出すためのパフォーマンス課題の設定
- はじめに、教師が「組曲『展覧会の絵』から」というタイ

トルのみを提示し、生徒に疑問を挙げさせた。その内容は、「いつ、どこか、誰がつくった作品なのか」「組曲とは何か」などの一問一答で答えられるようなものから、「なぜ、音楽なのに『絵』なのか、音楽と『絵』にはどのような関連があるのか」など音楽の特徴のみならず、音楽の背景などについての深い理解がなければ解決できないようなものまで多岐にわたった。そこで、生徒自身が教科書や資料集を用いて調べた事柄を交流した後、「曲の魅力を追及し、長く親しまれている理由を考えよう」という題材の「本質的な問い」を提示し、鑑賞の活動を通じて解決を試みることを計画した。

なお、本題材の大まかな流れは以下である。

時	学習内容	評価規準
1	<ul style="list-style-type: none"> ○「組曲『展覧会の絵』から」というタイトルから、疑問点を考える。 ○疑問点を追究する。 ○題材の学習課題を捉える。 <p>「曲の魅力を追及し、長く親しまれている理由を考えよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○組曲全体の構造(曲目)を把握し、より具体的な疑問点を考える。 [工夫①] 	知 態
2	<ul style="list-style-type: none"> ○「ビドロ」「卵の殻をつけたひなどりのパレエ」の特徴を捉える。 ○絵画を音楽によってどのように表現しているかについて考える。 [工夫①] 	知 思
3	<ul style="list-style-type: none"> ○第1プロムナードと第4プロムナードの特徴を捉える。 ○プロムナードの役割について考える。 [工夫①] 	知 思
4	<ul style="list-style-type: none"> ○組曲「展覧会の絵」の魅力について考え、交流する。 ○この曲が長く親しまれている理由について考える。 [工夫②] 	思 態

本題材におけるパフォーマンス課題の位置付けは、西岡の著書『『逆向き設計』で確かな学力を保障する』等に示されている「パターン1」パーツ組み立て型をイメージしている。なお、本題材における「本質的な問い」と「パフォーマンス課題」についてのイメージは以下の通りである。



上記のように、資料の読み取りや鑑賞の活動を通じて明らかにしたことを適宜他者との交流によって理解を広

げたり、深めたりし、パフォーマンス課題へと向かわせる。

なお、以下は、本題材において使用したワークシート、及び記入例である。

<使用したワークシートの例>

第1時

音楽科ワークシート
組曲「展覧会の絵」 その1 2年 組 香 氏 名

トピック 作品の魅力を追及し、長く親しまれている理由を探ろう！

疑問	答え
なぜこんなに面白いか？ (意味)	ガムサツの運命の行方
絵と音楽のつながり	絵の情景が音楽の情景と一致しているから
組曲の長さ	15分
いつから作られたのか	1874年
誰が作曲したのか	D.S.ニコルニコフスキー / 35歳の作曲家
どんな音楽か？	絵の情景を音楽で表現しているから
なぜ長い？	絵の情景を音楽で表現しているから

第2時

音楽科ワークシート
組曲「展覧会の絵」 その2 2年 組 香 氏 名

< 曲 目 >

1. プロムナード
2. グノム
3. プロムナード
4. 宮城
5. プロムナード
6. ツェルリナー
7. ビドロ
8. プロムナード
9. 卵の殻をつけたひなりのパレエ
10. サムエル・ゴルドンベルグとシュメイレ
11. リネージュの市場
12. カンパネラ地下を走り回っているカローラ時代の曲
13. 気持を言葉による死者への話しかけ(プロムナードの曲)
14. 橋の上の小屋
15. シンガ島に出てくる、若い娘とバーベリーの曲
16. キエフの大門口(古いロシアの儀式の大きな門)

この曲が長く親しまれている理由について再度個人思考させた。

第3時

音楽科ワークシート
組曲「展覧会の絵」 その3 2年 組 香 氏 名

卵の殻をつけたひなりのパレエ

この曲が長く親しまれている理由は、いろいろな音を使い分けてたくさんの絵を表現したり、作曲者が絵や展覧会で感じたことをこの曲を聴いた人にも(音楽で)感じさせたりするからだと思う。「ビドロ」では低くて長い音を使って重い足取りを、「卵をつけたひなりのパレエ」では高く短い音でちょこまか動いている様子を表現するところから、そう感じた。また、曲の中で数回繰り返されているプロムナードによって曲がまとめられていて、特徴の異なるいくつかの曲が合わさった組曲でも、バラバラな感じがしなかったり、あきたりしないのもこの曲が長い間親しまれている理由だと思う。

第4時

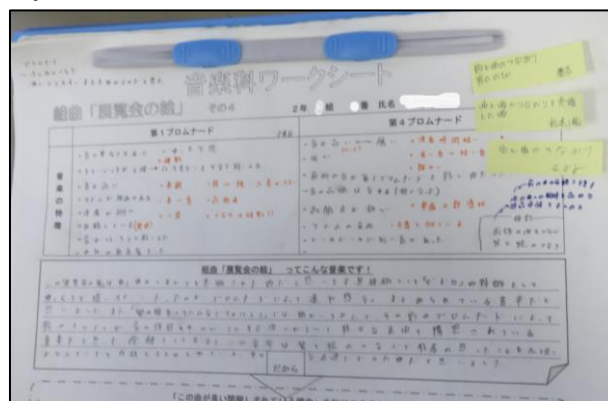
音楽科ワークシート
組曲「展覧会の絵」 その4 2年 組 香 氏 名

<この曲が長く親しまれている理由>

この曲が長く親しまれている理由は、いろいろな音を使い分けてたくさんの絵を表現したり、作曲者が絵や展覧会で感じたことをこの曲を聴いた人にも(音楽で)感じさせたりするからだと思う。「ビドロ」では低くて長い音を使って重い足取りを、「卵をつけたひなりのパレエ」では高く短い音でちょこまか動いている様子を表現するところから、そう感じた。また、曲の中で数回繰り返されているプロムナードによって曲がまとめられていて、特徴の異なるいくつかの曲が合わさった組曲でも、バラバラな感じがしなかったり、あきたりしないのもこの曲が長い間親しまれている理由だと思う。

5. 2. 授業の実際

本時は、題材の終末における、作品の魅力ならびに長く親しまれている理由について追究する場面である。前時までの学習の中で、①「ビドロ」「卵の殻をつけたひなりのパレエ」が音楽によってどのように表現されているのか、②「第1プロムナード」「第4プロムナード」には、それぞれどのような特徴があるのか、③プロムナードにはどのような役割があるのかについて、個人で思考した後、全体で交流してきた。それらの学習で明らかになってきた事柄を用いて、「組曲『展覧会の絵』の魅力、プロムナードの役割を含めて紹介文にまとめ、長く親しまれている理由について考察しよう」という課題を提示した。これまでの学習で使用してきたワークシートをもとに、個人で紹介文を書いた後、他者の紹介文との読み比べを行った。その際、自分の紹介文にはない記述の視点を付箋紙にメモさせた。その後、自らの紹介文の内容に加え、付箋紙に記されているメモも使いながら、「この曲が長く親しまれている理由」について再度個人思考させた。



5. 3. 結果と考察

本時の終わり提出された記述の一部(生徒A)が以下である。

<この曲が長く親しまれている理由>

「この曲が長く親しまれている理由は、いろいろな音を使い分けてたくさんの絵を表現したり、作曲者が絵や展覧会で感じたことをこの曲を聴いた人にも(音楽で)感じさせたりするからだと思う。「ビドロ」では低くて長い音を使って重い足取りを、「卵をつけたひなりのパレエ」では高く短い音でちょこまか動いている様子を表現するところから、そう感じた。また、曲の中で数回繰り返されているプロムナードによって曲がまとめられていて、特徴の異なるいくつかの曲が合わさった組曲でも、バラバラな感じがしなかったり、あきたりしないのもこの曲が長い間親しまれている理由だと思う。

生徒Aは、個人で紹介文を書いていた段階では、①曲の成り立ち、②組曲の説明、③プロムナードの役割、④「ビドロ」と「卵の殻をつけたひなどりのバレエ」の特徴を列記し、これらが魅力であると結論付けていた。しかしながら、その後の交流では、他者の紹介文から「曲ごとの特徴が(それぞれ)違う」「曲の情景等が想像しやすい(音楽)」と気づき、上記の「親しまれている理由」に盛り込んだことが見えてきた。

また、題材の冒頭では、先にも述べたように作曲家や作曲された時期などのように一問一答で答えられる疑問が中心だったが、学習を経るにつれて「なぜプロムナードが何度も出てくるのか、一つ一つに違いはあるのか」「それぞれ違う曲をどのようにつなげているのか」などの疑問が多くなっていったことも大きな変化であった。生徒自身が疑問を解決すべく学習に取り組むことで、より主体的に音楽と向き合う姿が見られた。さらには、「オーケストラの様々な楽器の組合せによって、原曲よりも多彩な“色”を音で表現しているのではないか」、また、「“遺作展”にあった絵画ということで、絵を描いた作者のコンセプトではない展覧会にバラバラに展示されていたかもしれない一枚一枚の絵画を一つ一つの曲で、そして、バラバラな曲をプロムナードによってまとめていることがこの曲の魅力ではないか」などの新たな見方や疑問をもたせられたことも大きな成果であった。

6. 今年次研究の成果と課題

本校音楽科では、今次研究の主題を「生涯にわたって音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」と掲げ、研究をスタートさせてきた。

本稿では、これまで1年次研究について述べてきたが、以下に本研究の成果と課題を述べる。

6. 1. 研究の成果

本校音楽科の1年次研究では、副題を「学びを生かし、主体的に音楽と関わる生徒を育成する方略の研究」とし、これまでの研究の成果として見られた個人思考と集団思考を適宜使い分けたり、生徒自身が学びの関連性を考えながら学習に取り組んだりすることを継続させながらも、「自分自身のための学び」から、「多様な音楽文化の理解・継承・発展」へと生徒の学びの目的をシフトさせることが必要であると考えた。

そうした考え方のもと、本校研究の4つの視点のうち、「『意欲』から『意味』への転換」に焦点を当てて研究を進めてきた。

この転換を図る際、最も効果的であると考えたのが「逆向き設計」論であり、その手法である。これまで述べてきた通り、「逆向き設計」論で提唱されている、学習の中核部分を「本質的な問い」に転換するという手立てを音楽

科なりに整理し、今次研究においては、音楽科における「本質的な問い」を「中学校において音楽科を学習する意義とはどのようなものだろうか。」と設定することとした。学びの主体となる生徒自身が自分自身のために学ぶことに留まらず、「音楽文化の理解・継承・発展」のために学ぶことが主体的に音楽に関わる一助となるとともに、こうした体験を繰り返すことにより、学びの意義を実感し、生涯にわたって音楽文化と豊かに関わっていくことができると考えた。そのため、表現領域(歌唱・器楽)、鑑賞領域における「本質的な問い」を「(題材で取り上げた)音楽の魅力と、その音楽が長く親しまれている理由を追究する」と据え、両領域において一貫して取り組ませることとした。

その結果、最も大きな成果として実感するのは、領域が異なっても同じ「本質的な課題」に取り組ませることで、「音楽そのものがもっている魅力」を追究するために、様々な角度から曲の特徴を捉えたり、捉えた事柄に広がりや深まりが生まれたりしたことを生徒自身が実感できるようになったことである。

第2学年の生徒の94.9%が音楽科の学習の際に、違う曲や題材、領域や分野との関連を考えながら学習していると答えている。また、中学校まで音楽科を学習する理由については、以下のように考えている。

- ①生涯にわたって音楽と関わるきっかけをつくるため。
- ②音楽によって心や生活を豊かにするため。
- ③長い歴史を経て受け継がれてきたものもあり、次の世代に受け継ぐ必要があるため。
- ④自国や他国の文化や歴史を知るため。

こうしたことから、単に「現在の自分自身が楽しいから」学んでいる段階から一歩進み、「将来の自分や他者にとっても現在の学びが有効に働く」と生徒自身が実感できていることが大きな成果であった。

6. 2. 研究の課題と今後の展望

以上の成果があった1年次研究であるが、その一方で課題もいくつか見られる。例えば、以下である。

①創作分野におけるつながり

生徒自身は、表現(主に歌唱)や鑑賞領域の学習の際に捉えた曲の特徴がその曲のもつ魅力へとつながっていることを実感し、自分が曲をつくる際に「音楽を形づくっている様々な要素を真似たり、取り入れたりしたい」という意欲はもっている。しかしながら、実際に創作の活動を始めると、曲をつくる際に考えなければならないことが多く、思っていたようには取り入れられなかったり、取り入れてはみたものの、効果を実感するまでには至らなかったりすることがあった。

②歌唱分野における「理解」や「思考」と「技能」のレベル

曲の特徴を捉え、魅力について理解し、「特徴や魅力を生かすためには〇〇のように表現したい」「作者がこのように曲をつくったのは、歌詞にある言葉や内容を△△のように表現してほしいと考えたからではないか」という思いや意図を生徒自身がもっていたとする。しかしながら、理解したり、思考したりしたから演奏で表現できるとは限らない。限られた授業時間の中で、曲について理解し、表現したいことについて思考し、それを実現するための技能を身に付けることが難しい。その理由としては、次の事柄が考えられる。

- i 一般的に、技能の習得には多くの時間を要する。そのため、題材終了時までには十分な技能が身に付かない場合が多くある。また、これまでの学習経験や音楽経験によっても習得している技能に差が生じる。
- ii 知識の獲得や思考力・判断力・表現力の向上には一斉指導、技能の習得には個別指導が適していると考えられる。

以上2つの課題から見えてくるのが、「表現の技能」をどのように捉え、獲得したり向上したりさせるかが課題と言える。そのためには、題材構成や題材配列、学習形態を工夫することに加え、これまで以上に学びの「意義」を実感させる取組を行うとともに、学びの系統性を意識して今後の研究を進めることが、1年次研究を前進させるために必要なことであると考えられる。

参考文献・論文

- (1)文部科学省「学習指導要領解説(平成29年7月)」
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(65)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(66)」
- (4)北海道教育大学附属旭川中学校「研究紀要(67)」
- (5)「平成29年版新学習指導要領の展開」明治図書. 2017
- (6)「平成29年改訂中学校教育課程実戦講座音楽」ぎょうせい. 2018
- (7)「中学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック」教育芸術者. 2018
- (8)西岡加名恵. 『『逆向き設計』で確かな学力を保障する』. 明治図書. 2008
- (9)西岡加名恵. 『『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』. 明治図書. 2016
- (10)西岡加名恵/石井英真. 「Q&A でよくわかる! 『見方・考え方』を育てるパフォーマンス評価』. 明治図書. 2018
- (11)西岡加名恵/石井英真. 「教科の『深い学び』を実現するパフォーマンス評価 『見方・考え方』をどう育てるか』. 日本標準. 2019